

お袈裟と聞くと、皆さんは何をイメージしますか？お坊さんの着る物とか、色によって位の違いをあらわしているとか、様々かと思えます。

曹洞宗では、下着、襦袢に着物を着て、その上に直裾とよばれる衣を着て、さらにその上に掛けるのが「お袈裟」です。日本の他の宗派も、袴を用いるところがあるくらいで大きな違いは無く、いずれも一番上に掛けるのがお袈裟となります。

現在のタイなど南方の仏教国の僧侶は、縫い合わせた布を一枚にしたお袈裟を体に巻き付けて生活をしています。これはお釈迦さまの時代の作法になったものです。その時代のインドでは、お袈裟は、人々がいらなくなり、捨てられた布を縫い合わせ一枚の長い布にしたものでした。暖かい気候ですので、それだけで過ごせたのです。

その後、仏教は各地に拡がり、インドより寒い地域に伝わると、下に着物を着るようになりました。

中国では、上半身を覆う偏衫と腰より下をまとう裙子という衣を下に着て、その上にお袈裟を掛けていました。偏衫と裙子が繋がって一枚になったものが現在日本で用いられている直裾です。

仏教が生まれたインド伝来のお袈裟、中国伝来の直裾と呼ばれる衣、そして日本の着物。日本の僧侶は仏教がインドから中国をへて日本へ伝来した歴史を身につけているとも言えるのです。その中でもお袈裟はお釈迦さまが掛けていたものと同じものを身につける事が、お釈迦さまの教えとともに、綿々と伝わってきているという大変有り難い事を表しているのです。

端から見ると、装束の一部、ユニフォームの一部に見えるかもしれませんが、穿った見方をすると位をあらわす権威の象徴に見えるかもしれません。

しかし、僧侶にとってお袈裟は仏さまの心であり、お釈迦さまの教えを實踐し、修行することを自覚する大切なものなのです。